



Title	ヴァージャペーヤ祭における戦車競走儀礼の諸相 : Vādhūla-Śrautasūtra 新写本に基づいて
Author(s)	坪田, さより
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2020, 54, p. 75-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヴァージャペーヤ祭における戦車競走儀礼の諸相

—Vādhūla-Śrautasūtra 新写本に基づいて—

坪田 さより

キーワード：王権儀礼／Vādhūla-Śrautasūtra／Vājapeya／戦車競走／ブラフマン祭官

1. はじめに

古代インド祭式文献の一つ Vādhūla-Śrautasūtra¹⁾ (VādhŚS) は、その古さと重要性にも拘わらず従来写本の質の低さゆえ研究が困難であったが、1990 年代に京都大学の井狩彌介名誉教授（現在）により極めて信頼性の高い新写本群が発見され、新たな研究が進められつつある。

本稿では、そのうちヴァージャペーヤ祭²⁾ (Vājapeya [VP] → 2.) を扱う第 9 章、特に VP の主要儀礼の一つであり、特徴的な規定を数多く含む戦車競走について、新写本に基づく分析を行う。用いる写本は、最も信頼性の高い K1、その欠損部を補うのに有用な K4 である。従来は欠陥の多い M が中心に用いられてきた。この他は VP 章を含まないか、K1 や M の複写である。参照する並行箇所は、祭式の手順に詳しい Yajurveda (YV) 系統 ŚS (BaudhŚS, Āp°, Hir°, Vaikh°, Mān°, Vār°, Kāty°) を主とする。BhārŚS の現存写本は VP 章を欠く。他の系統の ŚS (ŚāṅkhŚS, Āś°, VaitS 等) の記述は断片的であるため儀礼どうしの前後関係等の情報に乏しいが、必要に応じて適宜参照する。

2. VādhŚSにおけるVPと戦車競走

VPは、ソーマ祭の基本型アグニシュトーマ祭（Agniṣṭoma [AṢ]）を順次拡張し、独特の王権儀礼的要素を追加したものである。その規定を述べるVP章もAṢ章を前提としており、VPにおいて新たに追加される規定のみを最小限記述する形式を採る。

VādhŚSはVPの開催日程を「潔斎こそ17日間、準備祭が3日間、本祭が21日目」³⁾とする（AṢは潔斎1日間、準備祭3日間、本祭5日目）。他のŚSによく見られる祭主の身分や開催時期への言及は無い。⁴⁾ ソーマの汲み入れ・献供等（特に pañcaindrātigrāhya, āgrayaṇa, madhugraha [madhu は献供を伴わない。→ 4.5.]）と犠牲獣（プラジャーパティ [Prajāpati] 神への17頭の牡山羊など）が新たに追加され、特に本祭昼には戦車競走、灌頂、祭柱登りという主要な3つの儀礼、および Prajāpati への17杯のソーマとスラー酒の汲み入れ・献供等も行われる。戦車競走では、競走路の上を17台の戦車（うち1台に祭主が乗車）が走り、その間にプラフマン祭官が車輪の上で vājīnām sāman 「勝者たちの歌詠」を歌う。競走後に報酬を分配し、灌頂儀礼に入る（VādhŚSのVP章概要→表1）。なお、Prajāpati への犠牲獣・杯や戦車の数「17」は、詠唱を伴う特別なソーマ杯儀礼の数と一致しており、YV系統ŚSに共通する。VPの主要3儀礼のうち、灌頂は Rājasūya, Agnicayana にも、戦車競走は Rājasūya, Aśvamedha にも存在する。対して祭柱登りはVPにのみ見られる。

表1 VādhŚS第9章目次

戦車競走の規定をやや詳細に記し、後述する規定には下線を付す。

参照箇所	内容
IX 1,1 ⁵⁾ (Chau. 9,1 ⁶⁾)	全体規定（準備物の列挙、開催日数、サヴィトリ神へのバター献供）
IX 1,2 (Chau. 9,2)	準備祭1日目から本祭日朝までに追加する準備行為（スラー酒作り、チャル粥の用意等）

IX 1,3 (Chau. 9.3)	ソーマとスラー酒を汲む, madhugraha を汲む, 動物犠牲祭準備の独自規定 (犠牲獣の増加とそれに伴う準備物の数の増加)
IX 1,4 (Chau. 9.4)	動物犠牲祭の vapā 献供 —本祭日昼の圧搾 IX 1,4,26 から— 動物犠牲祭のマルトのための牝牛の献供
IX 2,1 (Chau. 9.5)	戦車競走準備 (トリパー製の衣等の着用, 戦車を台車から降ろす, 馬を灰汁で洗う, 戦車を繋ぐ, 太鼓準備, 車輪登り用の車輪準備, 戦車乗車, 車輪登り, 鞭入れ ⁷⁾ , 太鼓を叩く, <u>金片配布</u> , 馬にチャルを嗅がせる, 馬の耳にささやく)
IX 3,1 (Chau. 9.6)	戦車競走 (促し, 競走開始, 太鼓演奏, ヴァージナーム・サーマン, avacchinnahoma), 競走後処理 (戦車解放, 馬の右眼の窪みにチャルを擦りつける, 太鼓解放, 金片持ち寄り時の献供, <u>交換宣言</u> , 祭主が プラフマン 祭官のそばに座る)
IX 4,1 (Chau. 9.7)	競走後の報酬配布, 灌頂, 祭柱登り, 追加のソーマ献供等 —本祭日昼の圧搾 IX 4,1,50 まで— 5 日目第 3 の圧搾式からヴァージャペーヤ祭終了まで (Prajapati 神へのソーマとスラー酒の献供等)
IX 5,1 (Chau. 9.8)	降下儀礼 (pratyavarohaṇīya)
IX 5,2 (Chau. 9.9)	儀礼の意義の解説

3. 構成上の特徴

戦車競走・灌頂・祭柱登りという 3 儀礼の手順 (→表 2) については, 以下のことが注目される:

- (1) VādhŚS および同様に古層の BaudhŚS では競走と灌頂を祭柱登りに先行させるが, 他の YV 系統 ŚS (: 中期の MānŚS と新層の ĀpŚS, Hir°, Vaikh°, Vār°) では 3 儀礼の最後に灌頂を行う。
- (2) 第 3 marutvatiya 杯献供は VādhŚS でのみ 3 儀礼全てが終わった後にあり, 他の ŚS では競走準備中に位置する。māhendra 杯献供は VādhŚS では 3 儀礼と直接連続しないが, 他の ŚS では細分化され, 3 儀礼の進行に伴って順次行われていく。この差異は Rājasūya 章との関係において, 今後のさらなる検討を要する (→4.1.)。

表 2 Vājapeya における戦車競走、灌頂、祭柱登りの流れ

[]内はAŚに規定される行為 (C-H 以下は Caland-Henry の参照箇所) : dakṣ.h. = dakṣiṇāhoma (C-H § 186b); mar. = 第 3 marutvatīya 杯献供 (C-H § 193–7); mäh.g./ś./bh. = mähendra 杯献供 / スートトラ / シャストラ / 喫飲 (C-H § 198).

Vādh	Baudh	Mān	Āp	Hir, Vaikh	Vār	Kāty
競走準備 [dakṣ.h.] 準備続き ～競走 灌頂 祭柱登り [mar.] [mäh.]	競走準備 [dakṣ.h.] [mar.] 灌頂 準備続き 競走 [mäh.s.] -ś. 同時] 祭柱登り [mäh.bh.]	競走準備 [dakṣ.h.] [mar.] 準備続き 戦車競走・ 祭柱登り (同時) [mäh.s.] 同時] 灌頂 [mäh.ś.]	[dakṣ.h.] 競走準備 [mäh.g.] 準備続き ～競走 [mäh.s.] 開始] 祭柱登り 灌頂 [mäh.ś.] 同時]	[dakṣ.h.] 競走準備 [mäh.g.] 準備続き ～競走 祭柱登り [mäh.s.] 開始] 灌頂 (Hir [mäh.ś.])	競走準備 [dakṣ.h.] 準備続き ～競走 [mäh.g.] 同時] [mäh.s.] 祭柱登り 灌頂 [mäh.ś.]	[mar.] 戦車競走 祭柱登り 灌頂 [mäh.s.]

4. 戦車競走における諸規定の分析⁸⁾

4.1. トリパー製の衣等の着用

競走前には戦車や馬の用意といった準備を行うが、VādhŚS では準備の最初に祭主がトリパー草製の衣とダルバ草製のターバンを着用し、祭主の妻も何かしら衣を身に着ける。

VādhŚS IX 2,1,2–4

2. *sanneṣu nārāṣaṃseṣu tārpyaṃ yajamānaḥ paridhatte*. ナーラーシャンサ (ソーマ喫飲用椀に喫飲後「膨らませ」行為を施したもの) たちが (第 3 marutvatīya 杯 [→ 3., 表 2] に備えて、荷車小屋内に) 座を占めると、祭主はトリパー製 [の衣] を身に着ける。

3. “*kṣatrasya yonir asi*”-ity uṣṇīṣaṃ paryasyate darbhamayam. 「君は王権の

母胎である (TS I 7,9,1{a}; 8,12,2; 16,1)」といて [祭主は] ダルバ製のターバンを [自分の頭／その他の身体部位 (cf. BaudhŚS [Rājasūya] へその周りに) に] 巻きつける。

4. *etasmin kāle patnīm paridhāpayanti*. この時に, [祭主の] 妻に [トリパー製の衣を?] 人々は身に着けさせる。

VādhŚS の当規定は同 ŚS の Rājasūya 章にある「トリパー製の衣」の規定と同一である。対して他の黒 YV 系統 ŚS では, 同じマントラの詠唱, 祭主のトリパー製の衣着用以外に, VP と Rājasūya の規定が共通する点は無く, 互いに異なる規定である (→表3. KātyŚS では, 両規定の共通点はより限られる)。

当規定は, 他の YV 系統 ŚS では祭柱登りの冒頭にあるが, VādhŚS では第 3 *marutvatīya* 喫飲用の梘の安置後, 競走準備冒頭に, すなわち「戦車競走→灌頂→祭柱登り」という 3 儀礼の流れの先頭にある。

VP・Rājasūya の各規定内容について (→表3), 他の YV 系統 ŚS では Rājasūya でのみ祭主がターバンを, VP でのみ妻がマントラとともにダルバ

表3 トリパー製の衣等着用の規定

w[ith], m[antra]: マントラと共に身に着けることを示す。kṣauma 「亜麻製の衣」, pāṇḍara 「白い [衣]」, tripāṇa 「花没薬樹／盗人萩製の [衣]」, caṇḍaka 「ベチコート」, dahara 「小さい [衣]」?, pāṇḍva 「未染色のウールの衣」。

		Vādh	Baudh, Āp, Hir, Vaikh	Mān, Vār (点線部は異なる)	Kāty
VP	祭主	tārpya (w. m.), uṣṇīṣa darbhamaya (w. m.)	tārpya (w. m.)	tārpya (w. m.), kṣauma … (w. m.)	記述無し
	妻	[tārpya?]	darbhamaya (w. m.)	darbhamaya	kauśa / caṇḍātaka / dahara
Rāja- sūya	祭主	VP と同	tārpya (w. m.), uṣṇīṣa (w. m.)	tārpya (w. m.), pāṇḍara (Vār kṣauma) (w. m.), uṣṇīṣa	tārpya, kṣauma/ tripāṇa, pāṇḍva, uṣṇīṣa (all w. m.)
	妻	VP と同	記述無し	記述無し	記述無し

製の衣を身に着けるのに対し、VādhŚS では両祭式で、祭主がトリパー製の衣とダルバ製のターバンをそれぞれマントラとともに身に着け、妻がマントラ無しで何らかの衣を身に着ける。なお VādhŚS で妻が着るものについて、他の黒 YV 系統 ŚS は *darbhamaya-* を示唆するが、文脈からは *tārpya-* を補うのが自然と思われる。

4.2. 車輪登り

準備中、車輪登り用の車輪を設置し (IX 2,1,14), ブラフマン (Br.) 祭官が「私はブリハस्पティ [神] によって最高の天蓋に登りたい」とマントラを唱え、車輪の上に登る (20)。そこで祭主が (おそらく Br. 祭官と見つめ合いつつ) 彼に向かって同マントラの変形を唱える。

VādhŚS IX 2,1,21

21. “*devasyāhaṃ savitūḥ prasava*” *iti brahmāṇaṃ parekṣamāṇam* *adhvaryur yajamānaṃ vācayati* “*br̥haspatinā vājajitā brahmaṇā varṣiṣṭhan nākaṃ ruheyam*” *iti*. 「私は、サヴィトリ神の鼓舞（聖化）のもと、勝利を勝ち取るブリハस्पティ [すなわち] **brahmaṇ** によって、⁹⁾ 最高の天蓋に登りたい。(TS I 7,8,1 {b} ¹⁰⁾ var.)」と、アドヴァリユ (Adh.) 祭官は、見はるかしている ¹¹⁾ Br. 祭官に向かって祭主に言わしめる。

(1) 車輪登りに際して Br. 祭官と祭主両方がマントラを唱えるのは VādhŚS だけである (→表 4. BaudhŚS: 祭主のみ, 他: Br. 祭官のみ)。また, Tait. 派の新層 ŚS (Āp, Hir, Vaikh) では車輪登りでのマントラと祭主の戦車乗車時のマントラとが交替している。KātyŚS と ŚB (および ŚāṅkhŚS XVI 179 [補遺集]) では Br. 祭官が、競走前に車輪に登る時は「私は登りたい (aor. opt.)」で、競走後に降りる時は「私は今登った (aor. ind.)」で終わるマントラを唱える (4.3.)。

(2) マントラに *brahmaṇ-* の語を加える点は、他の YV 系統 ŚS には見られ

表4 祭主による戦車乗車とブラフマン祭官らによる車輪登りの際のマントラ

1行目：「発言者-祭式行為」。時系列：MānŚS, VārŚSで車輪登り→戦車乗車, KātyŚSで車輪登り→戦車乗車→車輪から降下。他は左から右へ列順。記号：a = TS I 7,8,1{a}¹³⁾；b = TS I 7,8,1{b}；~a (MS) = MS I 11,1:162,5-7；~b (MS) = MS I 11,1:162,5；b var. = VādhŚS IX 2,1,21のマントラ。空白部：記述の欠如を示す。

	祭主 -戦車乗車	Br.祭官 -車輪登り	祭主 -車輪登り	Br.祭官 -車輪から降下
Vādh	a ¹²⁾	b	b var.	
Baudh	a		b	
Mān	~a (MS)	~b (MS)		
Vār	~a (MS)	~b (MS)		
Āp, Hir, Vaikh	b	a		
Kāty, ŚB	VS IX 13a	VS IX 10a		VS IX 10b

ない変形である。これに関してTB, およびŚBが当該マントラの解説部分で, *bṛhaspatinā* を *brāhmaṇā* の語で説明していることは注目に値する。¹⁴⁾ このことを考慮に入れるならば, VādhŚS はこうしたマントラ解釈の議論を背景に, 説明的な *brahmaṇā* の語をマントラ自体の中に含めたものと見ることができよう。但し, このマントラの使用状況における Br. 祭官の積極的な役割に鑑みれば, 「Br. 祭官によって」と解釈されている可能性も排除できない (→注9)。

4.3. 「ujjiti マントラ」：金片配布と金片持ち寄り時の献供

競走前に祭主がマントラを唱えて17の金片を競走者たちに渡す。競走後に Adh. 祭官がマントラを唱えて *sruvāhuti* を行い, その間競走者たちが金片を祭主のもとに持ち寄る。

VādhŚS IX 2,1,28 金片配布 (競走前)

“ ‘agnir ekākṣareṇa vācam **ujjayatv** ” iti saptadaśa hiraṇyaśalkān + ājīṣṭdbhyaḥ+¹⁵⁾ prayacchaty, “ **ujjayatām ujjayantv** ” ity etair. 「アグニは1つの音節によって言葉を勝ち取れ (TS I 7,11,1-2¹⁶⁾ var.1)」といって,

17の金片を競走者たちに「祭主は」差し出す、「彼ら両者は勝ち取れ。彼ら（複数）は勝ち取れ」と（各定動詞をiptv.にして）これら（マントラ）を伴って。

…（中略）…

VādhŚS IX 3,1,12–13 金片持ち寄り前の献供（競走後）

12. *samāharanty asmai hiraṇyaśalkān ājīśṛtaḥ*. 競走者たちはこの者（祭主）に諸々の金片（IX 2,1,28で渡されたもの）を持ち寄る。

13. *teṣu samāhriyamāṇeṣv “agnir ekākṣareṇa vācam udajayiṣīd” iti sap-tadaśa sruvāhutīr juhoty “udajayiṣtām udajayiṣur” ity etā(h)*. それら（金片）が持ち寄られつつあるとき、「アグニは1つの音節によって言葉を今勝ち取った¹⁷⁾（TS I 7,11,1–2 var.2）」といって17のスルヴァ（小匙）による献供をAdh.祭官は献供する、「彼ら両者は今勝ち取った。彼ら（複数）は今勝ち取った」といって（各定動詞をaor. ind.にして）これら（献供）を。

(1) ujṣiti マントラの使用場面（→表5）は、YV系統ŚS間で不統一であるものの（Tait. 派新層であるĀpŚS, Hir°, Vaikh°は競走中に用いる点で一致）、VādhŚSはujṣiti マントラ（→注16. 但しVādhŚS IXはこの呼称を用いない）

表5 「ujṣiti マントラ」の使用場面

丸印○は、その場面でTS, MS, VSそれぞれのujṣiti マントラ（TS I 7,11,1–2; MS I 11,10:181,14–183,10; KS XIV 4:203,5–204,5; VS IX 31–34）を唱えることを示す。VādhŚS 行のvar.1とvar.2はそれぞれIX 2,1,28, IX 3,1,11に見られるマントラを示す。Mānのみ、Vādhのみとある箇所は、その祭祀行為自体が他のYV系統ŚSに無いことを示す。

	Vādh	Baudh	Mān	Vār	Āp, Hir, Vaikh	Kāty
17 āhuti (Mānのみ) にて			○			
祭主乗車後		○		○		
金片配布時（競走前なのはVādhのみ）	var.1					
競走中					○	
金片持ち寄り時の17 sruv-āhuti (Vādhのみ) にて	var.2					
灌頂後						○

の変形に当たるものを、どの他派とも異なる場面に、しかも二度に分けて用いる点で異彩を放つ。

(2) VādhŚS のマントラは、競走前に「勝ち取れ」と命令し、実際に競走を経た後には「今勝ち取った」と aor. ind. でマントラの内容を今しがた目の前で起こったこととして実況的に確認する。これは、他の黒 YV 系統 ŚS で用いる TS, MS の ujjiiti マントラが「勝ち取った」と ipf. により、マントラの内容を単なる過去の出来事として報告することと対照的である。こういった儀礼の進行に合わせてマントラの定動詞を変える工夫、特に儀礼行為の直後に aor. ind. で行為の完了を確認する方式は、白 YV の車輪登りでも見られた(→4.2.)。

(3) VādhŚS はマントラを規定する際に、主語となる神格の文法上の数 3 種を全て含む形で動詞の活用形を提示し、これをマントラ全体の定動詞に適用すべきことを示す。具体的には、TS の ujjiiti マントラ(→注 16)はアグニ等を主語とする単数形 *údajayat*, アシュヴィン双神を主語とする双数形 *údajayatām*, マルト神群等を主語とする複数形 *údajayan* を含むが、VādhŚS はそれぞれの数に対応した活用形を代表として示す。ŚS に見られる *ūha* (マントラや既出の規定文を用いる際、使用状況に応じて文中のある語を別の語と入れ替える方法)の一種と言えよう(→4.2. ŚāṅkhŚS XVI 177–8)。

(4) 他の ŚS で金片に相当すると思しき *kr̥ṣṇala-*「黒い木の実分[の重さの黄金]」は、競走後に配布・返却され、そのまま蜜杯(→4.5.)に相当する蜜の器とともに Br. 祭官に与えられる(Tait. 派 ŚS)か、競走後配布されてそのまま回収されない(おそらく競走者たちのものになる。MānŚS, VārŚS)か、そもそも登場しない(KātyŚS)。

4.4. avacchinnaḥoma

競走中に異常があった場合の献供が往復路に分けて規定される。

6. “*uta smāsyā dravatas turāṇyata_s*” *iti caturgṛhītenāvacchinna-homam āhavanīye juhuyād yadi dravatām +avacchindyād*+¹⁸⁾. 「そして、突進して走って行く彼の、[すなわち] 滋養を備え、曲がり角を回って次々と越えて行くダディクラヴァン（神話上の名馬）の[体の後を追って] 風が吹き続ける、ちょうど食欲に突き進む鳥の翼の後を追って、滑空しつつある鷹の[翼の後を追って、そうする] ように」（TS I 7,8,3{m}¹⁹⁾）, [スヴァーハー]²⁰⁾」と4回汲まれた[バター]で、*avacchinna-homa*をアーハヴァニーヤ[祭火]に献供するべきである、もし走っているもの（往路の競走者）たちのうちの[誰かが、車輪など戦車の部品／馬を]分離させるようなことがあれば。

7. “*uta smāsyā dravata_s*” *iti yady ādravatām* “*parṇan na ve=taritrata svāh_ae-*” *-ti*. 「そして、突進している彼の、{(同上)}（TS I 7,8,3{m} var.）, スヴァーハー」といって[献供するべきである]、もし帰って来るものたちのうちの[(同上)]。

(1) *avacchinna-homa*-は当該箇所にものみ在証される語である。*ava-chid*「切り離す、分離する」の語義を前提として、後述する BaudhŚS の類似規定を参照するならば、戦車の部品（特に車輪→注 22）が分離するといった戦車のトラブルが想定される。また、ŚB V1,5,17 には、*Adh.* 祭官の弟子が祭主の戦車に競走前に同乗し、VS IX 13b (TS I 7,8,1{f} に対応) を唱えたとあるが、このうち *kāṣṭhāṃ gacchata* は途上で諸々の邪魔ものや障壁が馬たちを傷つけないようにするためにと説明される。この解説から、競走中に馬に関わるアクシデントへの懸念のあったことがわかる。ゆえに *avacchinna-homa*- は「戦車とその部品、あるいは戦車と馬が分離した場合の献供」と考えられる。²¹⁾

他の YV 系統 ŚS は競走中か競走後の献供を規定するが、異常事態があった場合の献供を規定するのは BaudhŚS だけであり、そこでは競走直後に「戦車の損傷 (*rathabhreṣa*-²²⁾) を（人々が）伝える場合」に TS I 7,8,3{m} を唱えてアーグニードラ祭火に献供するとされる。

(2) VādhŚS は往復路のどちらで起きたかで場合分けする。往復路での場合分け自体は ĀpŚS, HirŚS, VaikhŚS にも見られる (→表6)。

表6 競走中から競走直後までのマントラと献儀

TS I 78 のマントラについて, TS I 78,1-2 {f} を *f*, TS I 78,2{i} の前半部を *i(a)*, 後半部を *i(b)* のように略記する。また, 各サンヒターでの対応関係は以下のものである (∴ はここで単純な対応関係を示す)。

VS IX 13b ∴ (RV 対応無し) ∴ TS I 78,1-2 {f} ∴ MS I 11,2:162,8

VS IX 18 ∴ RV VII 38,8 ∴ TS I 78,2 {g} ∴ MS I 11,2:162,12-13

VS IX 17 ∴ RV X 64,6 ∴ TS I 78,2 {h}, {i}a ∴ MS I 11,2:162,14-16

VS IX 16 ∴ RV VII 38,7 ∴ TS I 78,2 {i}b, {k} ∴ MS I 11,2:162,10-11

VS IX 14 ∴ RV IV 40,4 ∴ TS I 78,3{l} ∴ MS I 11,2:163,1-3

VS IX 15 ∴ RV IV 40,3 ∴ TS I 78,3{m} ∴ MS I 11,2:163,4-5

	競走中			競走終了直後
	往路	旋回時	復路	
Vādh	分離する場合 homa w. m	4 ṛc : g, h, i, k, l	分離する場合 homa w. m + svāhā	
Baudh	4 ṛc : g, h, i, k, l ²³⁾ → mähendragraha-homa & pañcaindrātigrāhya-homa			戦車の損傷を伝える場合 homa w. m
Āp	4 ṛc : f, g, h, i 祭主 ujñiti		4 ṛc : i, k, l, m	homa ?w. n
Hir	3 ṛc : f, g, h 一説に 4 ṛc : f, g, h, i 祭主 ujñiti		4 ṛc : h, i, k, l 一説に 3 ṛc : h, i, k	homa w. n
Vaikh	4 ṛc : f, g, h, i 祭主 ujñiti		4 ṛc : h, i, k, l	homa w. n
Mān	mähendragraha 汲み + stotra + 祭柱登り			homa w. MS (∴ n)
Vār	yajus : MS (∴ f) + 4 ṛc : MS (∴ i(b)-k, g, h-i(a), l, m)			homa w. MS (∴ n)
Kāty	祭主 VS (∴ f) VS (∴ l, m) w./wo. homa + 3 ṛc : VS IX 16-18 (∴ i(b)-k, h-i(a), g)			

4.5. 交換宣言とブラフマン祭官の madhugraha 喫飲

金片を持ち寄った (→ 4.3.) 競走者たちに, 祭主が言葉を発しつつ「スラーのウパヤーマ杯」を渡し, おそらくそれと交換で金片を得た後, 金片と蜜杯 (madhugraha) を伴って Br. 祭官のもとに行く。その蜜杯から Br. 祭官

がマントラを唱えて喫飲する。なお、この後蜜杯は Br. 祭官、金片は祭主に
 帰属する（他 ŚS での金片について→4.3.(4)）。

VādhŚS IX 3,1,14–4,1,1. (anuvāka を跨いで連続している)

3,1,14. *atraiva yat sate 'tiśiṣyate tam suropayāmaṃ kṛtvā +vājasṛd-bhyaḥ+*²⁴⁾
*prayacchati, “yatra vājam udajaiṣṭaitena vas tam +pari-kṛñāmī-” -ti+*²⁵⁾.

まさにここで、サタ（スラー用桶）に残っているところのそれをスラー
 のウパヤーマとした後、²⁶⁾ 戦利品を巡って競走する者たちに²⁷⁾ [祭主は]
 差し出す、「勝利／戦利品を君たちが勝ち取った今、これ（スラー）と、
 君たち（競走者たち）のそれ（vāja- [具体的には金片か]）を私は交換
 する」といって。

3,1,15. *etais ca hiraṇyaśalkair madhugraheṇa ca cātvāḥasyānte 'var-ūḍhaṃ
 brahmāṇaṃ yajamāna upasīdati.* この諸々の金片と蜜杯とを伴い、チャー
 トヴァーラ孔（祭場北東）の傍に [車輪から] 降りた Br. 祭官の近くに、
 祭主は座る。

4,1,1. *tasya brahmā bhakṣayati “manasā tvā vācā bhakṣayāmi prāṇena
 cakṣuṣā tvā śrotreṇa bhakṣayāmy āyusā” iti.* Br. 祭官はそれ（蜜杯）の
 [いくらかを] 喫飲する、「思考機能によって、言語機能によって、私は
 君を喫飲する。呼吸機能によって、視覚機能によって君を、聴覚機能に
 よって私は喫飲する、生命力のために」といって。

(1) IX 3,1,14 の交換宣言について、他の黒 YV 系統 ŚS では、競走後
 (MānŚS Prajāpati への杯喫飲後) 競走者たちにスラー杯 (graha か upayāma)
 を、Br. 祭官に蜜の器等と呼ばれるもの (→ 4.3.(4); 4.5.(2)) を渡すが、その
際に発言するという規定は見られない。一方 MS I 117:169,10–13 と KS XIV
 8:207,3–208,2 は発言を規定しないが、競走者たちからスラー杯と、Br. 祭官
 から蜜の器 (sthāla) と交換に vāja- を得る (pari-kṛī) とする。VādhŚS の
 tam を vāja- と仮定すれば、VādhŚS は MS, KS と同様の行為を前提としてい

と思われる。

競走後の交換宣言は KātyŚS, ŚB にもある。その内容はネーシュトリ祭官が「これ（スラー杯）で君のこれ（祭主と Adh. 祭官から渡された蜜杯）を私は買い取る」（*anena ta imaṃ niṣkrīṇāmi*）といって、戦車に待機中のヴァイシャカ王族にスラー杯を渡すというものであり、直接 VādhŚS の参考にはできないが、興味深い類例と言えよう。

(2) IX 4,1,1 のような規定は他の YV 系統 ŚS には見られない。そもそも蜜杯を汲んで安置するのは VādhŚS と KātyŚS だけであり、VādhŚS はそれらの際にもマントラ（Agnicayana 祭より借用したものと出典不明のもの）を規定する。通常のソーマ杯（*graha*）が神格に捧げる献供を目的として汲まれるのに対し、蜜杯は両 ŚS で献供されず、Br. 祭官の手に渡ることも注目される。蜜杯のこうした特殊性には、*madhugraha*- の名の由来と、印欧語古来の蜜酒からソーマへの置換の歴史とが関係している可能性があり、今後慎重な検討を要する。なお蜜杯は、他の黒 YV 系統 ŚS における黄金製（または銀製、MānŚS）の蜜の器（*sthāla/pātra*）等に相当すると思われる（→4.3.(4)）。

喫飲時のマントラは YV にパラレルが無く、類例が RV 系統の KB XII 5, ŚāṅkhŚS VI 8,14 に確認できるが、どちらも *Bahiṣpavamāna-stotra* に関するものであり、VādhŚS VP 章との関連性は不明である。

5. おわりに

他の YV 系統 ŚS と比較して、VādhŚS の VP 章には、祭式行為の手順（: 3., 4.1.）、マントラと祭式行為の組み合わせ（: 4.2., 4.3.）、マントラ・発言の内容（: 4.2., 4.3., 4.5.）、祭式行為自体（: 4.4., 4.5.）それぞれについて特徴的な相違があった。特に Br. 祭官と直接・間接に関わるものが見られた（: 4.2., 4.3., 4.5.）。このような相違点を調査することは、Vādhūla 派の特異性を明らかにすると同時に、他派との関係性や Vādh 派の成立過程、他の文献における VP の解釈・位置づけの解明にも繋がると期待される。今後は本研究を、

そのようなさらに包括的かつ精密な研究へと結び付けたい。

[注]

- 1) 伝統的に Tait. 派所属とされる Vādhūla 派の祭式手順書。
- 2) *vājapeya-* は *vāja-*「(特に戦車競走での) 勝利, 勝利をもたらす力, 戦利品」と *peya-*「飲み物」の複合語で, その意味については諸説あるが「勝利(あるいは勝利をもたらす力, 戦利品)のための飲み物」と考えられる。
- 3) VādhŚS は, 潔斎 13 日間・本祭「17」日目のタイプを否定する。他の ŚS では, 可変である潔斎日数のみ記すと: BaudhŚS, Vaikh° 13/17/3 のオプション; Āp° 17/13; Hir°, Śāṅkh° 13; Mān°, Vār°, Kāty° 17。つまり VādhŚS は, 他の Tait. 派 ŚS がいずれも含む潔斎 13 日間タイプを否定し, 他の YV 系統 ŚS と同じタイプを採用している。
- 4) 祭主の身分: BaudhŚS にも言及無し。Āp°, Hir°, Vaikh°, Mān°, Vār° ではバラモンカクシャトリヤ(または王族)。Kāty° は *avaiśya-* と表現する。一方で ŚāṅkhŚS XVI 174(補遺集)はヴァイシャの場合も認める。開催時期: Āp°, Hir°, Mān°, Vār°, Kāty°, Śāṅkh°, VaitS では秋。BaudhŚS「夏の終わりの日々のうち, āṣādh 月の前の満月に潔斎する」。VaikhŚS「春を始めとする4つの季節(: 春・夏・雨季・秋?)の満月[の日]の前に潔斎する」。
- 5) テキスト区分は IX 1,1 = [prapāṭaka, 章] [anuvāka, 節] [paṭala, 小節] [スートラ]のように読む。前者2つは注釈書において, paṭala は ŚS 写本において区切られる(paṭala は写本系統により異なる)。VādhŚS は pravacana 体で編纂されているが, Chaubey 氏や井狩教授に倣い, 便宜上記述を細分化した各単位に独自に番号を付して sūtra 体の体裁とする。
- 6) Chau. : ed. Chaubey. 現在 VādhŚS 唯一の全章刊本であるが, 旧写本に基づくため修正すべき点が多い。
- 7) 他の YV 系統 ŚS は鞭入れ(マントラを唱えつつ馬を鞭打つ行為)を競走準備の最後に位置付けるため, これが競走の開始を表すように見える。しかし VādhŚS では鞭入れは準備の最中に位置付けられるため, これに当てはまらない。
- 8) 【テキストと和訳の凡例】。/. /. /. . . (x) : 1 / 2/ 3/ x 音節の欠損を示す (x > 3)。
[] : 欠損部のテキストを補う。+□+: 読みを校訂したことを示す。[] : 訳語を補う。《 》: 補われた欠損部に対応する訳語を示す。本稿における欠損音節数は, 井狩教授が欠損箇所の周辺の行における長さに対する音節数の平均値を計算し, 推定したものを参考としている。マラーヤラム文字の性質(※), 省略記号(=)の存在をも考慮に入れると, 数は一概に推定し難く, 文脈の精査を要する。なお,

異読は校訂箇所・欠損部についてのみ注記する。

※マラーヤラム文字は子音字に母音 a を含み、母音記号のうち -i, -ī, -u, -ū を子音字の特定の位置に付加し、-ā, -e を子音字の横に 1 文字、-o, -ai, -au を子音字の横に 2 文字付加することで表す。

- 9) *bṛhaspatinā* … *brahmaṇā* について、n. *brāhmaṇ-* の場合、「Bṛhaspati すなわち言葉の実現力によって」、m. *brahmāṇ-* の場合、「Bṛhaspati すなわち Br. 祭官によって」あるいは「Bṛhaspati によって、Br. 祭官とともに」。
- 10) TS I 7,8,1{b} (=TB I 3,6,1) *devāsyaḥāṁ savitūḥ prasavé bṛhaspátinā vājajītā vārsiṣṭhaṁ nākaṁ ruheyam*
- 11) 車輪登りの際、*parekṣamāṇa-* の語を用いるのは VādhŚS のみ。 *parā-ikṣ* は Br. 祭官に呼びかけている祭主を見やっていることを指すと思われる（天の方向を、とも考えられるが、「天蓋に登りたい」といって車輪の上に登った後であるから、既に象徴上 Br. 祭官が天にいと想定する）。
- 12) IX 2,1,19 “*devasyāhaṁ savitūḥ prasava*” *iti namaskṛtya ratham ātiṣṭhati* “*bṛhaspatinā vājajītā vājaṁ jeṣam*” *iti*. 「私が、サヴィトリ神の鼓舞（聖化）のもと、勝利／戦利品を勝ち取る Bṛhaspati により、勝利を勝ち取らんことを (TS I 7,8,1{a})」と敬意を表した後、[祭主が]戦車に乗車する。
- 13) TS I 7,8,1{a} (=TB I 3,6,1) *devāsyaḥāṁ savitūḥ prasavé bṛhaspátinā vājajītā vājaṁ jeṣam*.
- 14) TB I 3,6,1「サヴィトリに鼓舞（聖化）されてこそ、*brāhmaṇ-* によって勝利を勝ち取る・最高天に上る」。ŚB V 1,5,2–9 および ŚBK VI 2,1,2–5 では、戦車乗車・車輪登り・太鼓設置に際して唱えるマントラ全てについて、祭主の身分により神格名を入れ替える。その一連の解説を通して、バラモンが祭主の場合に Bṛhaspati 神の名を含むマントラを用いる理由が「Bṛhaspati は *brāhmaṇ-* であるから。(ŚBK 一方,) バラモンは *brāhmaṇ-* であるから」と説明される。
- 15) 諸写本の読みを訂正。K1: *ājīṇṛdbhyaḥ*; K4: *ājīṇṛbbhyaḥ*
- 16) *ujjiti*「勝ち取り」マントラ：アグニから Prajāpati までの 17 種の神々について、「○○は…を勝ち取った」と述べていく：TS I 7,11,1–2 *agnīr ékākṣareṇa vācam údajayat | aśvīnau dvyaḥkṣareṇa prāṇāpānāv údajayatām | viśṇus tryākṣareṇa trīṇ lokān údajayat | ... | marūtāḥ sapṭākṣareṇa sapṭāpadām śákvarīm údajayan | ... || (→2) vāruṇo dāsākṣareṇa virājam údajayat | ... | prajāpatiḥ sapṭādaśākṣareṇa sapṭadaśām stómam údajayat ||* なお、MS の *ujjiti* マントラは 4 組あり（登場する神格も TS とは一部異なる）、MānŚS ではこれの最初の 3 組を祭主が唱えた後、Adh. 祭官が最後の 1 組を唱えつつ 17 の *āhuti* を献供する。KātyŚS が用いる VS のマントラでは TS と同様「○○は…を勝ち取った」と述べていくが、その度に「それ（／それら）を私は勝ち取りたい (*tām* / *tān*) *újjeṣam*)」を挟む（登場する神格も TS とは一部異

なる)。

- 17) *jaylji udajayiṣṭ* : *ajayiṣṭ* は *ajaiṣṭ* の変形→Narten 1964:119. -y-の挿入→AiG I § 36A. p. 40. *ajaiṣṭ* は s-aor. ind. *ajais* (2/3sg.) の 2sg. から 3sg. を差異化するため、それに -ṭi を付した二次的な語形→Narten Ibid.:19.
- 18) 諸写本の読みを訂正. K1, K4: *apañchindyād*
- 19) TS I 7,8,3{m} (= RV IV 40,3; etc.) *utā smāṇasya drāvatas turan̐yatāḥ | pañām̐ ná vér ānu vāti pragardhīnaḥ | śyenāsyeva dhrājato ankasām pári | dadhikrāṇṇaḥ sahāóṛjā táritrataḥ ||*
- 20) VādhŚS の文体は基本的に、祭式行為に用いるマントラを分割して、間に祭式行為を表す定動詞を含む文を挟む。すなわち「(マントラ冒頭部)+(定動詞を含む文)+(マントラ後続部)」という構造を取る。しかし IX 3,1,6 では冒頭部のみが引用され、続く 7 でマントラ後続部を含む形が示される。6 の冒頭引用は、7 のマントラ後半部を予定したものと考えられ、6 では「6 冒頭部+7 後続部」が、7 では「7 冒頭部+7 後続部」がマントラとして唱えられると解釈する。ただし、7 冒頭部での *turan̐yatas* の欠落から 7 のマントラは TS I 7,8,3{m} の変形と思われる、6 と 7 の書き分け、すなわち往復路でのマントラの使い分けが想定される。
- 21) *ava-chid* を一般的に「物事を中断させる」と捉えれば、*avacchinna*homa-「中断された[競走]のための献供」という意味も想定できよう。例：LāṭyŚS X 3,13 「Gavāmayana に中断された (*avacchinna*-) *pṛṣṭha* [-stotra] は実にそのように始まる」；ĀśŚS I 2,25 *nāvachedāda*u.「[1 と 2 分の 1 の仕方 (詠唱法の一つ) および *abhihiṃkāra* は] 中断などにおいては無い」(*avacheda*-: Sāy. *avasāna*-「休憩場所」；Mylius 1994 “Nicht bei einer Pause”；ただし PW s.v. “Abschnitt (in einem Śāstra und dgl.)”).
- 22) m. *bhréṣa*- は Hoffmann 1975(1955): 32–34 によると *bhrī* (*bhrīṇanti*, *bhreṣate*)「傷つける」に由来し、意味は「傷つけること；損傷、傷」であり、単独ではほぼ常に *ni-ay/i*「(ある状況に) 到る、陥る」とともに用いられ、中には走行中の戦車の車輪の損傷について表す用例 (AB V 33,3) もある。
- 23) TS I 7,8,2 {g}–{l} は TS での数え方では 5 つになる ({j} は存在しない)。しかし RV に遇れば {h}–{i} を一組と数えるのが本来であり、その数え方 ({g},{h}–{i},{k},{l}) に従って BaudhŚS は {g}–{l} を *pratīka* で 4 詩節と表現していると捉えるべきである。VādhŚS も {h}–{i} を一組と数えている。
- 24) 諸写本の読みを訂正. K1: . . . (5)ḥ; K4: *vājasṛtbhyaḥ*
- 25) 諸写本の読みを訂正. K1, K4: *parikrīṇāmīnty*
- 26) Prajāpati 神への 17 の *surā-upayāma* あるいは *surāgraha* が競走者たちの手に渡るのは YV 系統 ŚS に共通である。しかし VādhŚS ではこの *surā-upayāma* とは別に、*surā-upayāma* 作成後 *sata* に余ったスラーを *surā-upayāma* にして金片との交換に用

いる (IX 3,1,14) と思われる。MS と KS の交換にこういった規定は無い。類例として BaudhŚŚ XI 11:79,7 に「余りを伴う (*saprareka-*) スラー」(*sata* のことか) の語が見える。

- 27) 祭主以外の 16 人の競走者の呼称：VādhŚŚ *ājisṛt-* (IX 3,1,1-2; 11; 4,1,6), *vājasṛt-* (IX 3,1,13; 4,1,8); BaudhŚŚ *ājisṛt-*; Tait. 派 ŚŚ 新層 *vājasṛt-*; MānŚŚ, VārŚŚ *viś-* 「人々；ヴァイシャ」, *ājisṛt-*; KātyŚŚ *viś-*。

[参考文献]

略語および一次文献については、日本印度学仏教学会「ヴェーダ文献学関係略語および書誌一覧 (2018 年 8 月 27 日版)」を参照されたい。

[二次文献および略号]

Caland W. et V. Henry (1906–1907) *L'agniṣṭoma: Description complète de la forme normale du sacrifice de Soma dans le culte védique*, 2 vols., Paris (English translation in 2015, Pune) [= C-H]

Hoffmann, K. (1975) “Die angebliche Wurzel *bhreṣ-*”, *Aufsätze zur Indoiranistik*, hrsg. von Narten, Wiesbaden : 29–34 (= 1955, Fs. Schubring : 19–24)

井狩彌介 1995「新発見のヴァードゥーラ・シュラウターストラ写本とその評価について」『インド思想史研究』7 : 1–18

Narten, J. (1964) *Die sigmatischen Aoriste im Veda*, Wiesbaden

Mylius, K. (1994) *Āśvalāyana-Śrautasūtra*: Erstmalig vollständig übersetzt, erläutert und mit Indices versehen von —, Wichtrach.

[謝辞]

本研究に際し、井狩教授には貴重な諸写本・資料の提供および度重なる助言を賜っている。また伏見誠氏には同氏の Vājapeya 祭に関する貴重な修士論文を提供いただいた。両氏に心より感謝申しあげる。

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

On Some Aspects of the Chariot Race of the Vājapeya:
Based on the Newly Found Manuscripts of the *Vādhūla-Śrautasūtra*

Sayori TSUBOTA

The *Vādhūla-Śrautasūtra* (VādhŚS) is one of the oldest ŚSs, which are Indian ritual manuals. This is a study of its Vājapeya chapter based on the new reliable manuscripts that are found in the 1990s. The Vājapeya, one of the kingship rituals accompanied with some remarkable elements such as the chariot race, the royal consecration, and the climbing of the sacrificial post. VādhŚS puts the race and the consecration before the climbing of the post, which is distinctively followed by the offering of the Marutvatīya-cup.

The chariot race, especially, has many notable prescriptions that are not found in other Yajurvedic ŚSs: 1. First, the sacrificer puts on clothes made of T ṛpā-grass, which is described samely in the Rājasūya of VādhŚS, but differently in the Rājasūya of other ŚSs. 2. After the Brahman-priest ascends the chariot-wheel reciting a mantra, the sacrificer recites a variation of the same mantra toward him, in which the word *brahmaṇā* is inserted, probably as a supplementary explanation of *bṛhaspatinā*. 3. Immediately before the race, the sacrificer distributes golden chips to the participants of the race, reciting a variation of the so-called Ujjiti-mantra. After the race, the Adhvaryu-priest offers libations reciting its another variation. Whereas the Taittirīya-Saṁhitā (to which the VādhŚS has hitherto been said to belong) uses in this mantra imperfects describing the simple distant past, VādhŚS instead uses imperatives in one variation before the race and then aorist indicatives in the other describing the actual past after the race, according to what actually happens in the ritual, adding each form of three different numbers. 4. The libation, uniquely named Avacchinnaḥoma, should be offered relating to accidents during the race. 5. After the race, collecting the golden chips, the sacrificer utters “I trade this (= Surā-upayāma-cup) for it (= *vāja*-, probably referring to the chips) of yours.” After that, the Brahman-priest drinks of the Madhu-cup reciting a mantra of an unknown source.